福岡教育大学紀要，第46号，第４分冊，169-177（1997）

中学校入学時のオリエンテーション行事と，新入生の適応に関する教師評定

Orientation programs for seventh graders in junior high schools and teachers' evaluation of the program's effects on students' adjustment

小　泉　令　三
Reizo koizumi
（第四部心理科）
（1996年９月10日受理）

A mailed questionnaire designed to survey the current situation of orientation programs for seventh graders in junior high schools and teachers'evaluation of the programs in students' adjustment was returned from 188 junior high schools in Fukuoka prefecture. Results show that there are three major subgroups of 13 orientation programs:(1) those that are conducted in most schools and get teachers' high evaluation;(2) a group of programs that have high rate of enforcement but do not show very high evaluation by teachers;(3) the others. In addition to an outline of the orientation programs, details of unique and well-designed programs peculiar to some schools were obtained.

中学校入学は，それまで親しんだ小学校環境を離れ，中学校という新環境への移行を経験する事態である。中学校環境は小学校環境に比べ，学校規模の拡大，教科担任制への移行，部活動や新教科（英語など）の学習開始など，多くの新しい経験を含んでいる。さらに，多くの子どもにとって，この時期は心身の変化が著しい思春期への移行とも重なる。それゆえに，子どもにとっては，二重の意味で重要な環境移行事態である。

こうした重要性をもつ中学校入学に関して，小学校６年生と中学校１年生の間で，学校生活に関する全体的な適応感や，教師との関係についての認知が低下することが明らかになっている（小泉，1995ａ）。また，子どもが入学前に抱く期待や不安はいくつかに分類することが可能で，その個人差は中学校入学後の適応状態と関連があることが小泉（1995ｂ）の縦断的研究で報告されている。

このように，中学校入学事態での子どもの適応に関して，検討が進められてきている。しかし，さらに積極的に適応を援助するためには，米国でいくつか試みられているような教育的介入プログラムの開発がわが国でも必要である（小泉1992）。本研究では，そうしたプログラム開発の１資料を得るために，実際に教育実践場面において，どのような援助策が実施され，かつそれが新入生の適応にどのように貢献しているのかを，教師の観点から検討することを目的とする。なお，従来より，実践報告という形で中学校入学時のオリエンテーションについて，種々の方策が教育雑誌等で紹介されてきているが，クラス単位でのプログラムや工夫が多い（例：山田，1990）。ここでは，学校単位のプログラムに注目し，特に新入生のオリエンテーション行事として，どのような内容のものがどの程度実施されているのかを明らかにする。

方　法

調査・集計対象

福岡県下の全中学校375校（国立３校，公立351校，私立21校）を調査対象としたが，このうち集計対象としたのは，回答を得た188校（50.1%）であった。

調査内容

(1)学校に関する事項

学校名，入学式実施日，１年生の人数と学級数，１年生の出身小学校数，回答者の区分を尋ねた。

(2)オリエンテーション行事

11の行事（内容としては13項目）について，実施の有無，実施時期，新入生の適応への貢献度評定を尋ね，それ以外に各行事ごとにその内容に関

して，さらにいくつかの質問項目を設定した。これらの行事は，概ね実施される場合の時間的な順序にしたがって配列されている。また，小学校との連携や保護者に対する行事などを加え，さらに学校生活の中で，生活面の指導，学習，部活動なども含めて，できるだけ広範囲の事項を尋ねるようにした。なお，新入生の適応への貢献度評定では，「これは，新入生の適応に」という文の後に，「非常に役立っている」,「少し役立っている」,「どちらとも言えない」,「あまり役立っていない」,「全く役立っていない」の5段階を設定し，その中の1つを回答するように求めた。また，回答は回答者自身の考えに従ったものでよい旨も明記した。

(3)各学校独自の取り組み

1年生のオリエンテーションに関して，(2)で尋ねた行事以外のものを調べるために，その他の行事や特別な工夫点を自由記述で求めた。

調査時期と手続

1995年8月中旬に質問紙を各学校長宛に郵送し，調査への協力を依頼した。調査時期の設定にあたっては，オリエンテーション行事のかなりの部分が終了しており，かつ回答にあたって学校での教育活動にできるだけ支障のない期間となるように考慮した。回答者は，1年生の学年主任または1年生の学級担任1名とし，2週間程度での返送を求めた。

結　果

以下に，調査項目の順序にしたがって集計結果を述べる。なお，各オリエンテーション行事での，実施時期，実施場所など具体的な実施内容についての割合（%）は，実施している学校のみを対象（分母）として算出したものである。

学校に関する事項

(1)入学式実施日

4月7日（金）（82校，43.6%），10日（月）（39校，20.7%），12日（25校，13.3%）が多かった。

(2)1年生の人数と学級数

人数の平均は153.0人であった。学級数は3学級（38校，20.2%），5学級（34校，18.1%），4学級(32校，17.0%)，そして6学級(29校，15.4%)が多かった。

(3)出身小学校数

2校（70校，37.2%），3校（47校，25.0%），1校，(26校，13.8%)，4校(12校，6.4%)の順で多かった。

(4)回答者の区分

学年主任またはそれに該当する者が145名（77.1%），学級担任が10名（5.3%），その他・未回答が33名（17.6%）であった。

オリエンテーション行事

各行事の実施状況を表1に，新入生の適応への貢献度評定を表2にまとめた。さらに，表と重複するが視覚的な理解のために，それぞれの内容を図1，図2に図示した。

(1)小学校との引継のための連絡会

実施時期は，3月が134校（78.4%），2月12校（7.0%），1月6校(3.5%)，その他19校(11.1%)となっていた。実施場所は，小学校が48校（28.1%），中学校が118校（69.0%），未回答5校（2.9%）であった。連絡会への出席者数は，小学校側

表1　オリエンテーション行事の実施校と実施率

行　事	実　施	未実施	未回答
小学校との引継連絡会	171(91.0)	14(7.4)	3(1.6)
新入生説明会	164(87.2)	21(11.2)	3(1.6)
保護者への説明会	173(92.0)	11(5.9)	4(2.1)
入学式での歓迎催し物	141(75.0)	41(21.8)	6(3.2)
上級生全員との対面式	180(95.7)	4(2.1)	4(2.1)
生活指導面での説明	150(79.8)	33(17.6)	5(2.7)
部活動紹介	184(97.9)	4(2.1)	0(0.0)
部活動見学期間設定	176(93.6)	11(5.9)	1(0.5)
部活動への全員加入	56(29.8)	131(69.7)	1(0.5)
部活動への加入時期設定	144(76.6)	42(22.3)	2(1.1)
新入生歓迎遠足	115(61.2)	73(38.8)	0(0.0)
集団宿泊訓練	142(75.5)	45(23.9)	1(0.5)
定期試験準備説明会	109(58.0)	79(42.0)	0(0.0)

数字は学校数，（　）内は割合（%）を表す

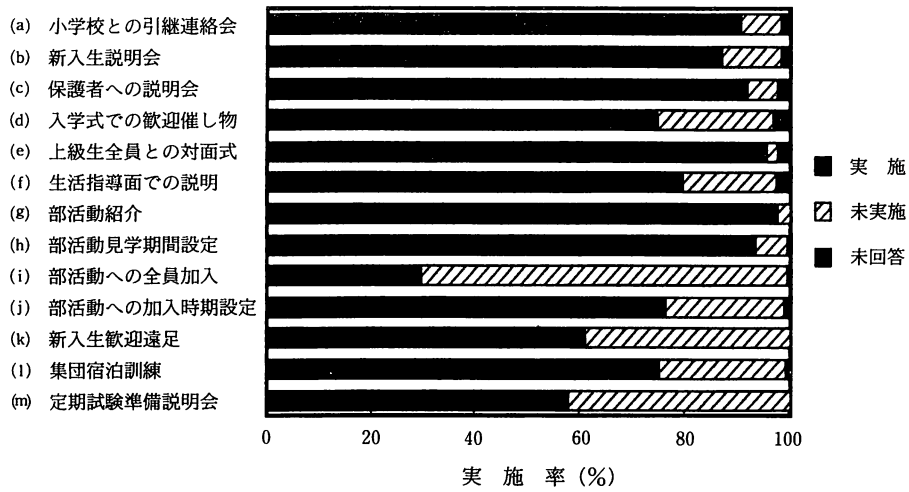

図1　オリエンテーション行事の実施率

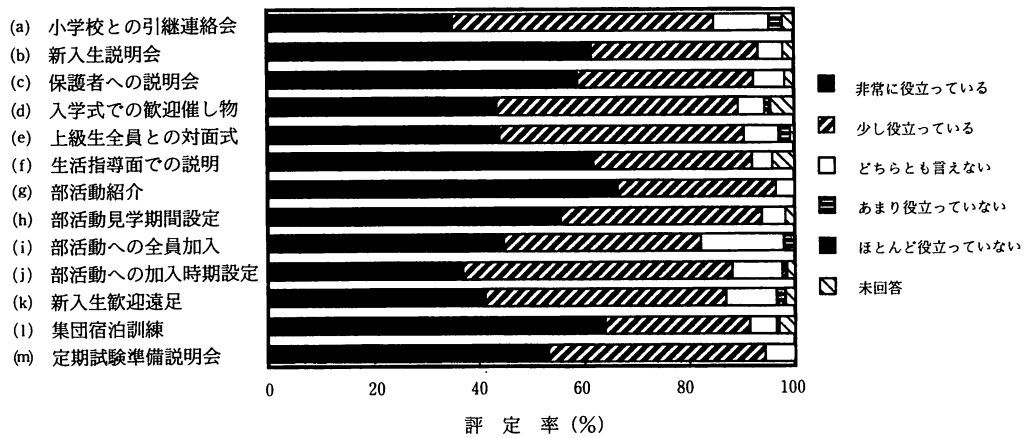

図2　オリエンテーション行事の新入生の適応への貢献度評定の割合

が1校あたり平均3.4名，中学校側が平均6.0名であった。連絡会の内容に関する集計結果を表3にまとめた。

9割を越す学校で連絡会がもたれており，また内容的には，たいてい「特に指導を要する事項」や「学習に関すること」が含まれている。なお，連絡会を2回実施している学校が10校あった。

(2)新入生への説明会（入学式実施日前）

実施時期は，2月が90校(54.9%)，3月46校(28.0%)，1月20校（12.2%），その他8校（4.9%）であった。実施場所は，小学校が110校（67.1%），中学校が54校（32.9%）であった。説明会の内容に関する集計結果を表4にまとめた。

新入生への説明会は2月ないし3月に小学校で実施されることが多く，新入生の適応に「非常に役立っている」との評価の割合が高い。説明会では，中学校生活に関するかなり広範囲のことが説明されている。

(3)保護者への説明会（入学式実施日前）

実施時期は，2月が100校（57.8%），3月43校（24.9%），1月23校（13.3%），その他7校（4.0%）であった。実施場所は，小学校が112校（64.7%），中学校が60校（34.7%），その他が1校（0.6%）となっていた。説明会の内容に関する集計結果を表5にまとめた。

新入生への説明会と同時に実施している学校があった。新入生への説明会と同様に，2月ないし3月に小学校で実施され，新入生の適応に「非常に役立っている」との評価の割合が高い。

(4)入学式前後での上級生による歓迎の催し物など

表2　オリエンテーション行事の新入生の適応への貢献度評定

	役立っている		どちらとも言えない	役立っていない		未回答
	非常に	少し		あまり	全く	
小学校との引継連絡会	60(35.1)	85(49.7)	18(10.5)	5(2.9)	0(0.0)	3(1.8)
新入生説明会	101(61.6)	52(31.7)	8(4.9)	0(0.0)	0(0.0)	3(1.8)
保護者への説明会	102(59.0)	58(33.5)	10(5.8)	0(0.0)	0(0.0)	3(1.7)
入学式での歓迎催し物	61(43.3)	65(46.1)	7(5.0)	2(1.4)	0(0.0)	6(4.3)
上級生全員との対面式	79(43.9)	84(46.7)	12(6.7)	4(2.2)	0(0.0)	1(0.5)
生活指導面での説明	93(62.0)	45(30.0)	6(4.0)	0(0.0)	0(0.0)	6(4.0)
部活動紹介	122(66.3)	56(30.4)	6(3.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
部活動見学期間設定	98(55.7)	67(38.1)	8(4.5)	0(0.0)	0(0.0)	3(1.7)
部活動への全員加入	25(44.6)	21(37.5)	9(16.1)	1(1.8)	0(0.0)	0(0.0)
部活動への加入時期設定	53(36.8)	74(51.4)	14(9.7)	1(0.7)	0(0.0)	2(1.4)
新入生歓迎遠足	47(40.9)	53(46.1)	11(9.6)	2(1.7)	0(0.0)	2(1.7)
集団宿泊訓練	91(64.1)	39(27.5)	7(4.9)	0(0.0)	1(0.7)	4(2.8)
定期試験準備説明会	58(53.2)	45(41.3)	6(5.5)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)

数字は学校数，（　）内は割合（%）を表す

表3　小学校との引継連絡会の内容

	含む	含まない	未回答
学習に関すること	159(93.0)	7(4.1)	5(2.9)
運動に関すること	134(78.4)	25(14.6)	12(7.0)
特に指導を要する事項	168(98.2)	2(1.2)	1(0.6)

数字は学校数，（　）内は割合（%）を表す

表4　新入生への説明会の内容

	含む	含まない	未回答
学習に関すること	157(95.7)	7(4.3)	0(0.0)
生活に関すること	163(99.4)	1(0.6)	0(0.0)
部活動に関すること	147(89.6)	16(9.8)	1(0.6)
準備物に関すること	160(97.6)	4(2.4)	0(0.0)

数字は学校数，（　）内は割合（%）を表す

表5　保護者への説明会の内容

	含む	含まない	未回答
学習に関すること	167(96.5)	3(1.7)	3(1.7)
生活に関すること	170(98.3)	1(0.6)	2(1.2)
部活動に関すること	156(90.2)	13(7.5)	4(2.3)
準備物に関すること	165(95.4)	2(1.2)	6(3.5)

数字は学校数，（　）内は割合（%）を表す

生徒会長の挨拶のように，入学式の一部としての実施内容が含まれるためか，新入生の適応への貢献という点で，「非常に役立っている」との評価の割合はやや低くなっている。

具体的内容例としては，生徒会長による歓迎の言葉，歓迎の合唱，校歌紹介，中学校生活の紹介などがあげられていた。

(5)上級生（全員）との対面式

実施時期は，入学式の一部として実施している学校が6校（3.3%），入学式直後が22校（12.2%）入学式後2～3日以内が113校（62.8%），入学式後1週間以内が35校(19.4%)，そして未回答が4校（2.2%）であった。主催者は，学校側12校（6.7%），生徒会が166校(92.2%)，未回答が2校(1.1%）であった。実施時間は，30分が41校（22.8%），50分が41校（22.8%）と多く，平均は43.9分であった。主な内容としては，歓迎の言葉，先生の紹介，誓いの言葉，レクリェーション，記念品贈呈などであった。

ほとんどの学校で実施されており，また大部分の学校で生徒会の主催となっている。ただし，新入生の適応に「非常に役立っている」との評価の割合はあまり高くない。歓迎遠足の中で実施するといったように，他の行事との関連づけが見られる。

(6)生活指導面での説明（入学後）

実施時期は，入学式当日が10校（6.7%），入学式後2～3日以内が102校（68.0%），それ以降33校（22.0%），未回答5校（3.3%）であった。主催者の区分でいうと，学校側が86校(57.3%)，生徒会が15校(10.0%)，学校と生徒会の共同主催が41校（27.3%），未回答が8校（5.3%）であった。また実施時間は，50分が61校(40.7%)，60分が30校（20.0%）と多く，平均は56.2分である。主な内容として，学校生活のきまり・校則・心構えの説明，学校生活を劇やスライドで見せるなどであった。

約8割の学校で実施され，また学校側が中心となって説明を行っていることが多い。上級生との

対面式と同様に，かなりの学校で入学式後２～３日以内に実施されており，中学校生活の説明や，その特徴を伝えるという点で，重要な意味をもつと考えられる。

⑺部（クラブ）活動紹介

実施時期は，入学式当日が６校（3.3%），入学式後２～３日以内が67校（36.4%），それ以降104校（56.5%），未回答が７校（3.8%）であった。主催者は学校側が21校(11.4%),生徒会121校(65.8%)，学校と生徒会の共同主催が37校（20.1%），未回答が５校（2.7%）であった。また，実施時間は，50分が56校（30.4%），60分が47校（25.5%）と多く，平均は54.2分であった。

部活動は，中学校で新しく経験するものの一つであり，新入生にとって関心が高い。部活動紹介の実施率の高さはこれを裏付けており，また新入生の適応に「非常に役立っている」とする割合も今回の調査項目の中では，１番高い。

⑻部（クラブ）活動への参加について

内容として，部活動見学期間の設定，部活動への全員加入，部活動への加入時期設定の３項目を含んでいる。大部分の学校が見学期間を設けており，４月が146校（83.0%），５月が16校（9.1%）であった。また加入時期を設定している学校も多く，具体的には５月（88校，61.1%）と４月（37校，25.7%）が大部分である。新入生の円滑な部活動への参加が重要視されていることがわかる。ただし，全員参加にしていない学校の方が多い。

⑼新入生歓迎のための遠足

実施時期は４月が102校(88.7%)，５月７校(6.1%)，６月１校（0.9%），それ以降が４校（3.5%），未回答１校（0.9%）であった。実施形態は，徒歩中心が93校(80.9%)，交通機関利用20校（17.4%），未回答２校（1.7%）であった。特に特徴的な内容としては，生徒会主催のレクリエーション，縦割り班でのゲーム，球技大会，先生の紹介などが含まれていた。

徒歩を中心に，上級生とのふれあいを中心としている学校が多い。ただし，新入生の適応に「非常に役立っている」とする割合は，他の諸行事に比べて低目である。

⑽新入生のための集団宿泊訓練（合宿）

実施時期は４月が20校(14.1%)，５月31校(21.8%)，６月35校（24.6%），それ以降54校（38.0%），未回答２校（1.4%）であった。実施場所は，自然の家など公営の研修施設が多い。また主な内容は，飯盒炊さん，オリエンテーリング，登山などであった。

４分の３の学校で実施されており，また新入生の適応への貢献度評価も高い。これは，寝食を共にしての共同生活と野外活動体験により，交流の深まりが見られるためと考えられる。

⑾定期（中間・期末）試験準備のための説明会

実施している場合の主催者は，各学級担任が92校（84.4%），学校側が13校（11.9%），生徒会が１校（0.9%），未回答３校（2.8%）であった。実施形態はクラス単位が87校(79.8%)，学年全体で実施しているのが22校（20.2%）であった。実施時期は，５月が64校（58.7%）で最多であった。また，実施時間は50分が53校(48.6%)，30分が20校（18.3%）と多く，平均は48.0分であった。

６割程度の学校で実施されており，大部分はクラス単位で学級担任が，１授業時間程度の長さを説明にあてている。学習は学校生活で重要な意味をもつために，中学校生活で最初の定期試験のある５月に説明会が多く実施されている。ただし，新入生の適応に「非常に役立っている」という評価はあまり高くない。

以上，11行事の13項目（「⑻部（クラブ）活動への参加」は３項目を含む）の相互の関係を調べるために，各行事の実施率と新入生の適応への貢献度評定との関係を図示したものが図３である。貢献度評定の平均値は，「非常に役立っている」を５点，「全く役立っていない」を１点として順に点数化し，算出したものである。どの項目も，貢献度評定の平均値は4.1以上であるが，項目間で若干の違いがある。実施率と貢献度評定の間に正の相関関係（$r=.412$）が見られるが，小学校との引継連絡会，上級生全員との対面式，部活動への加入時期設定は，実施率の高さに比べて貢献度評定が低目である。

行事間の相互関係を検討するために，さらに実施率をもとに多次元尺度法を用いた分析を行った。ある２つの行事に関して，両方の行事を実施している学校の，全集計対象校に対する割合（範囲は0.00～1.00）を求め，それを行事間の類似性の指標とした。これをもとに，非計量的多次元尺度構成法を用いて，２次元解（ストレス値＝0.080）を求め，各行事の布置を図示したものが図４である。座標軸の解釈よりも行事間の類似性に注目すると，定期試験準備説明会，部活動への全員加入，新入生歓迎遠足が他の行事から離れている。これらは，いずれも実施率が６割以下であり，他の書行事との違いが示されることになったと考えられる。

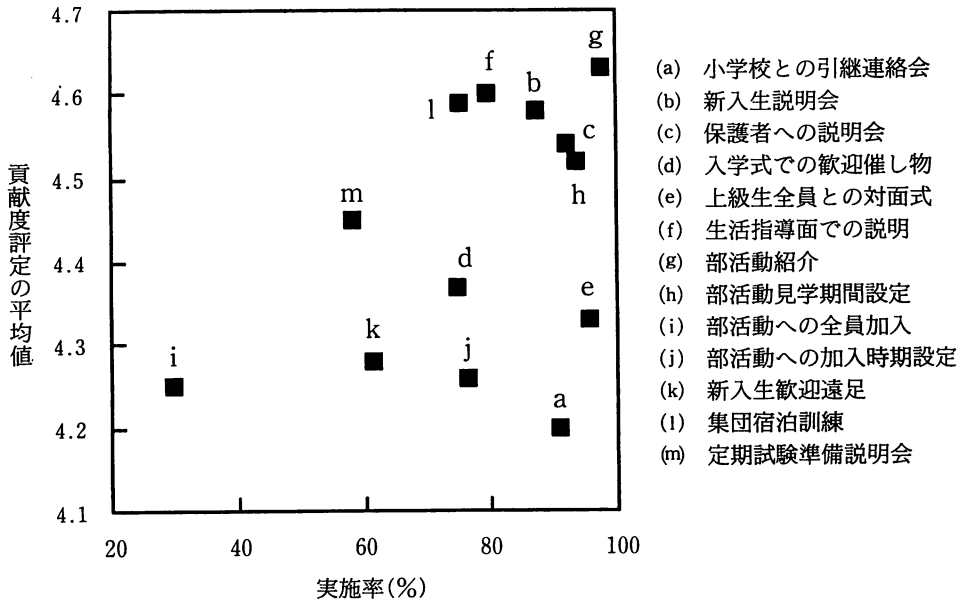

図 3　各行事の実施率と新入生の適応への貢献度評定との関係

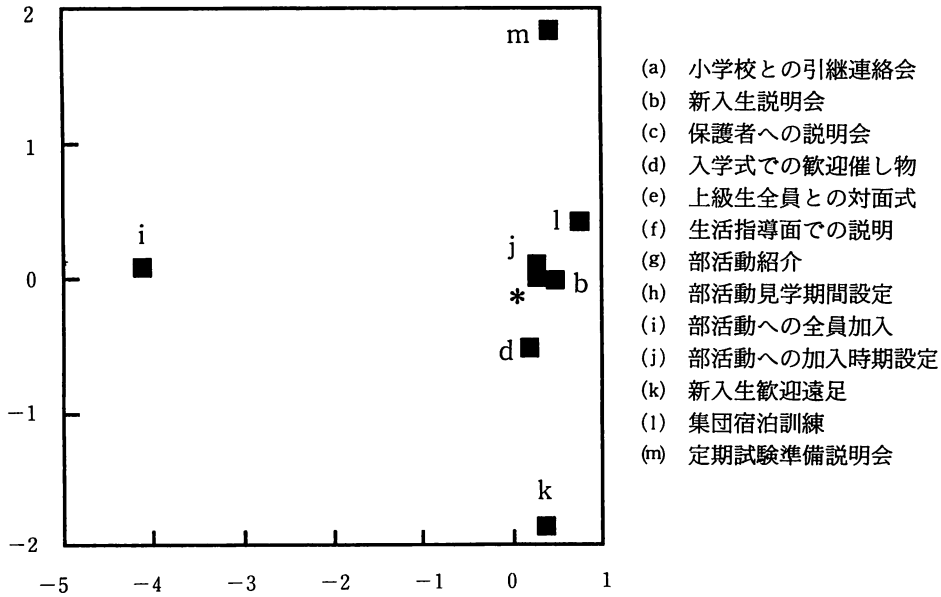

図 4　実施率にもとづく多次元尺度法の 2 次元解の布置
(＊のついた点には，(a)(c)(e)(f)(g)(h)が重なっている)

各学校独自の取り組み

上記の質問項目以外に，新入生のオリエンテーションに関して，実施している行事や特に工夫している点についての自由記述を求めた。得られた回答の中で，代表的なものを表 6 に示した。

考　察

今回調査したオリエンテーション行事を，実施

表6　新入生のオリエンテーションに関して，その他実施している行事や工夫している点

- 小学校での説明会で，学校行事のビデオを見せている。
- 生徒会執行部が，1日の流れや委員会活動を劇で説明した。
- 校区でのウォークラリー，ソフトバレーを班単位で実施している。
- 校舎見学，校内オリエンテーリングを実施。
- 「学年びらき」として，1年教師の決意表明を群読し，その後，教師のギター伴奏で「ひとりの手」を全員で歌った。
- 学級単位で，保護者との懇親会を，校外に席を移してもち，率直に語り合える場を設けている。
- 体育祭，文化祭の行事では，小学校に見学の呼びかけをしている。
- 生徒会代表が，新入生・保護者の前で説明をしている。
- 部活では，仮入部期間を設け，自分にあっているかどうかを試みさせている。
- 新入生の体験入学で，授業風景や部活動の練習風景を見学してもらった。
- 1学期末の保護者会において，”生徒が作る保護者会”という感じで，1学期の思い出のビデオ上映，1学期をふりかえっての作文や，夏休みの約束などを発表した。
- 1年の入学後にも，小学校の旧担任および養護教諭との小中連絡会をもっている。
- 生徒会の歴史（長髪にいたった経緯，生徒会の誓いなど）を学年集会で説明している。

率と新入生の適応への貢献度評定との関係で，大きく3群に分けて考察を行う。まず第1の群は，実施率が高く，かつ新入生の適応への貢献度評定が高い6項目（図3のb,c,f,g,h,l）である。これらの項目は，さらに3つのグループに分類することが可能である。

まず，部活動に関する2項目（紹介と見学期間設定）を1つのグループとしてあげることができる。課外活動としての部活動は，小学校6年生がもつ期待と不安の中で，重要な位置を占めていることが明らかになっている（小泉，1995b）。今回の調査で，部活動関係の上記2項目が，実施率と新入生の適応への貢献度評定の両方において高くなっていることから，中学校側あるいは教師としても，これらを重視していることがわかる。特に部活動の紹介では，学校との共同主催も含めると，生徒会が主催者となっている学校が85％を占めている。中学校環境内の対人的環境の要素として，教師と上級生があるが，特にこうした機会に，教師主導で紹介が進められるのではなく，上級生が大きな役割を果たしていることは注目に値する。校風を伝え，積極的な伝統を培うという意味で，上級生によるこの種の行事は，適応援助のためのプログラム開発でも，重要な位置づけが必要であると考えられる。

第2のグループは，新入生説明会，保護者への説明会，および生活指導面での説明である。これらは教師中心の行事であり，内容として，学習，学校生活，部活動，準備物と広範囲にわたる。すなわち，中学校教育での指針や指導の姿勢を，子どもと保護者（家庭）に伝達するという意味で重要である。新入生説明会と保護者への説明会の実施は2月と3月に集中している。中学校入学を控えた小学校6年生にとっては，中学校に関する関心が高まっている時期だけに，これら2つの行事は各自の中学校像を形成する上で大きな役割を果たしていると考えられる。

これまでの研究で，中学校についての情報提供は，入学後の適応を促進することが示唆されている。すなわち，兄姉のいる者にとっては，兄姉がアンカーポイント（拠点）として中学校生活についての情報源となっており，この兄姉の代わりに何らかの手段で情報提供ができれば，中学校生活に対する期待・不安や中学校入学後の適応に好ましい影響を与えることが予想されている（小泉，1994；小泉，1995b）。したがって，入学前の段階での新入生説明会や保護者への説明会は，今後，一層の工夫によって，その効果を高めることが可能であると考えられる。

第3のグループは，単独であるが集団宿泊訓練である。これは，寝食を共にする共通体験を通して，新入生同士の人間関係を促進する機会となるという意味で重要である。他の行事にはない特徴と言える。また，日頃の学校生活の中では，直接的に接する機会の少ない担任教師との関係も深まると考えられる。実施時期は，1学期に限らず，2学期以降に計画されている学校もある。教育財政面での支援と関連施設の整備が，この種の行事の普及に貢献していると考えられる。

次に，実施率と新入生の適応への貢献度評定との関係で大別した3群の中で，第2の群は，実施率は高いが貢献度評定が相対的に低い行事である。

これには，小学校との引継連絡会，入学式での歓迎催し物，上級生全員との対面式，部活動への加入時期設定があげられる(図3のa,d,e,j)。特に注目したいのは，小学校との引継連絡会である。9割の学校で実施され，小中学校からの出席者数も相当数に上るのに，新入生の適応への貢献度評定は低い。これは，新入生が直接的に経験する行事ではなく，例えば「特に指導を要する事項」が引継内容として含まれている学校が非常に多い（表3）ことからも明らかなように，むしろ教師の指導上の必要性に基づくものであるためと考えられる。しかし，"本当に知らせるべきことがマル秘になっていて，問題が起きた後で知る場合がある"といったことが，回答欄の欄外に記述されている回答もあり，この引継連絡会が必ずしも十分に機能しているとは言えないケースがあるようである。中学校入学事態では，小学校，中学校，そして家庭という3者の連携が重要な意味をもつ。それだけに，今後，改善の必要性が高いと考えられる。

実施率は高いが，貢献度評定が相対的に低い行事の中で，入学式での歓迎催し物，上級生全員との対面式は，ある程度，学校行事の一部もしくはそれに準ずるものとして位置づけられているために，慣例化し，また実施時間も短く，積極的な評価がしにくいのであろう。その意味では，実施方法によっては，より積極的な意味づけが可能な行事なのかもしれない。部活動への加入時期設定は，中学校入学と同時に部活動を開始した場合などに，生活のリズムが急激に変化することにより不適応になるような事態を避けること，および部活動への勧誘活動に秩序をもたせる目的があると考えられる。ただし，これを実施している学校でも，新入生の適応に「非常に役立っている」という回答の割合は低い。再度，評価してみる必要があると考えられる。

最後に，実施率と新入生の適応への貢献度評定との関係で大別した3群の中の最後の1群は，残りの3項目（図3のi,k,m；部活動への全員加入，新入生歓迎遠足，定期試験準備説明会）である。これらは，多次元尺度構成法を用いた分析結果(図4）でも，他の項目と異なる布置を示している。この3項目の中で注目したいのは，定期試験準備説明会である。学習は，学校生活の中で重要な意味をもつ上に，中学校では日常の授業は教科担任制となり，また評価形式も相対評価が中心となる。特に小学校と異なり，定期試験という形で全校的な試験週間が設定されている。こうした状況で，定期試験の準備説明会の実施率が6割に満たないというのは問題である。学級単位，もしくは教科ごとに何らかの指導はなされていると予想されるが，それが計画的・意図的に実施されていない学校があるのではないかと考えられる。もしそうであるのならば，大いに改善の必要性がある。

新入生歓迎遠足は，学校規模等の関係で実施の可能性が変わってくる。歓迎遠足の中で上級生による部活動紹介を行ったり，種々の生徒会行事を入れるといった学校もあった。今後，学校行事等の精選が進む中で，より一層の工夫が必要となるかもしれない。部活動への全員加入については，心身の健全育成という積極的な意味と，非行防止といった消極的な意味があると考えられる。部活動は，教育的意義は高いが，本来は教育課程外の活動であるという特徴がある。こうした特徴が，部活動への全員加入の実施率に反映しているのであろう。

今回の調査では，自由記述式で各学校独自の取り組みを回答してもらった（表6）が，それぞれよく工夫された内容であると言える。特に，中学校環境を大きく，物理的環境，対人的環境，社会・文化的環境に分けたときに，校舎見学や校内オリエンテーリングは物理的環境への適応を考慮したものと言える。1年生担任教師の決意表明や生徒会代表による説明などは，対人的環境での適応を目的としたものである。さらに学校行事の説明や部活動の見学は，社会・文化的環境を主眼にした企画である。そして，これらの行事や工夫は大部分，それぞれの環境を体制化するためのアンカー・ポイントを提供する役割をもっている。すなわち，それを拠点（基点）として，中学校環境についての理解と体験が進み，適応が促進されることとなる。こうした観点に立つとき，さらに有効な行事や工夫点の開発が進み，中学校入学時の教育的介入策の実施へとつながっていくと考えられる。

以上，本研究の成果をまとめると，(1)実施率と新入生の適応への貢献度評定から，オリエンテーション行事を3群に大別し，各群の特徴を考察することができた。(2)各行事の実施状況の概略を明らかにすることができた。(3)各学校独自の取り組みの中で，特色のあるものをまとめることができた。なお，今後の課題としては，各行事を実施していない場合の理由を調査することと，生徒による回答や評定を加えて総合的に検討することである。

引用文献

小泉令三　1992　中学校進学時における生徒の適応過程　教育心理学研究　**40**，348-358.
小泉令三　1994　中学校入学における情報の取得　福岡教育大学紀要，**43(4)**，291-297.
小泉令三　1995a　小学校から中学校における学校適応感の横断的検討　福岡教育大学紀要，**44(4)**，295-303.
小泉令三　1995b　中学校入学時の子どもの期待・不安と適応　教育心理学研究，**43**，58-67.
山田忠志　1990　子供の”頑張る”気持ちを認める姿勢で　教育心理，**38**，270-272.